伝えたい想い

今は亡き家族に…、同じ時を生きる人たちに…、まだ見ぬ未来の子どもたちに…、伝えたいことがある――。それは、戦争と平和、そして自らの人生の証。

家族の思い出編

遠い記憶の中に、今もなお生き続ける人。言葉にできなかった想いを今ここにつづる…。

父のこと

いなべ市北勢町　片山　正子

昭和十九（一九四四）年八月二十八日、この日が父の命日です。私が三歳、妹が一歳で、父の事は何も覚えていません。悲しい事です、悔しいと思います。昭和二十二年に死亡通知を受けたそうです。この日から私達家族は父のいない生活が始まったのです。

桑名の駅へ父を迎えに行きました。白い布の箱を首からかけた伯父と一緒に帰った、お父さん。私が父の事を覚えているのは、この事だけです。葬式の日、納戸で涙をふいていた祖父が不思議に思えてなりませんでした。

其原で生活をしたのはたった三年余りの父の事、私達子供の事など、おじいさんの思いなど今はわかるのですが、母は生活のために家の農業をし、雇ってくれるところでは何でもしました。川の工事の土方、稲刈り、田植え、お茶つみなどお金がもらえる仕事には、選んではいませんでした。母の休みの日は雨の日だけ。私や妹はこの日が大好きでした。

その母も今年九十歳を迎えます。足腰が悪く、歩くことが出来ません。ベッドと車イスの生活で大変ですが、今までこの体で私達をずっと守ってくれたのだと思うと、少しでも良くなる様にと、毎日介護にあたっています。今では私達姉妹もそれぞれ家庭を持ち、子供、孫のいる幸せな生活を営んでいますが、それが母への贈り物です。この先、母と一緒にどれだけいられるか分かりませんが、この母といる限り私と母の終戦はありません。

最後に、私達はずっと遺児と呼ばれて来ましたが、もう私達でたくさんです。平和な日々が長く続くことを願っております。

父に誓う ―靖国の社頭で

員弁郡東員町　種村　靖子

「若き母　老いたる母も　睦まじく
　春の浄土へ　旅立った今」

世の中から〝戦争〟という言葉がなくなってしまえば良いのにと思う今。人々が口をつぐみ、表現を控え、腰が引けたさまは、再び忍び寄る暗い過去の影におびえているためなのか、〝戦争〟は昔話、思い出話であってはなりません。核だって地球上にゴロゴロしています。私事、平成十七（二〇〇五）年七月三日、夢であった靖国の社頭で祭辞を読ませて頂き、去年の十八年八月十五日、遺児である主人と共に県代表として、全国戦没者追悼式に参列させて頂きました。

その節に、衆議院議員・田村憲久先生から色紙を戴き、先生の計らいで他の先生方お一人お一人から署名を快く頂戴した色紙「心の絆」を記念として手元に持っています。他に、数少ない、軍事郵便等大切に保存していますが、妻子のこと、故郷を思う内容ばかりです。せめてこれからは遺児だけでも、英霊を慰め、お金では買えない物として、子から孫へと伝えたいのです。なお、地域の皆さんに助けられ、育てられた、あの頃を想い出し感謝しながら……

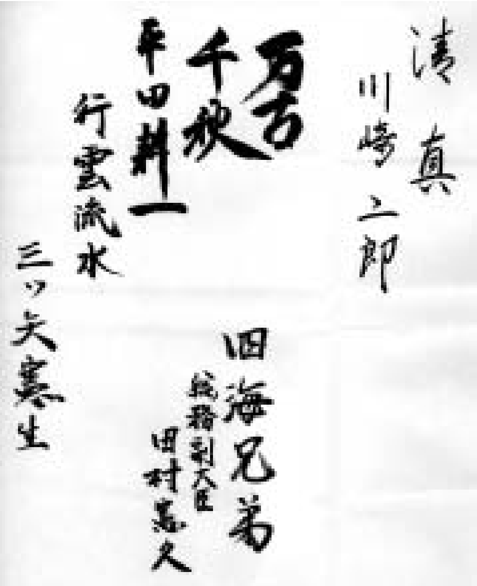
再び子どもや孫を戦場に送らない、二度と戦争を起してはいけない、との決意を新たにしている私です。

私が五歳、姉が十歳の暑い夏の昼さがり、軍服姿の父を見つけ、「お父さん！お父さん！お父さん！」と、叫びながら一目散に畦道を走りました。「ただいま、大きくなったな」……姉と私が両の手にしがみついたのですが――人違いだったのです。こんな夢を白昼夢を、夜中に、うたたねの中で、何回見たことでしょう。

母や祖母の苦労は人様には言えない、言葉では言い尽くせないものだったと……。やっと子育てが終った私には、今わかってきました。一家の大黒柱を失った母、困難辛苦に耐えて頑張って来た母も、この世にはいません。でも、靖国神社で亡き父に逢えて良かったと思っています。私の声がきっと父に届いたと信じています。

戦後早や六十年の歳月が流れ、徐々に戦争の悲惨さが忘れ去られようとしていますが、尊い命を祖国の為に捧げられた戦没者の崇高な精神をどのように伝えるか、再びあの様な地獄を見せてはいけないし、子々孫々まで、たとえ極楽は夢としても、地獄の再現を絶対にさせてはいけないのです。それが、今、生かされている私達の責任です。

世界に比類なき憲法を持っている私たちは、世界の恒久平和と人類の福祉向上の先頭に立つことを、靖国の社頭で誓いました。



衆議院議員・田村憲久先生からの色紙

亡き父を偲ぶ旅

多気郡大台町　西村　雅夫

私はこのたびの「戦没者遺児による沖縄慰霊友好親善訪問」に参加させていただき、次のような気持ちで、彼の地に眠る父に語り掛けました。

「今日、ここに亡き父の眠る戦没地沖縄に降り立ち感情の高ぶりを覚えます。

多くの遺児が集い、慰霊追悼を行うと共に現地の方々との友好親善を深めることは戦没者の遺族にとって無上の喜びであり、感謝に堪えません。

私が満一歳の誕生日を迎えて間もなく戦地に赴き、北支、中支と転戦し沖縄の地で散った父の想い、若くして夫を失った寂しさと痛手に耐えながら懸命に働き、子どもを育て、家族を守った亡き母の姿、母ひとり、子ひとりの母子家庭を憂い、母の背を鏡とし母を助けた少年の頃、数十年を経た今日においても偲ぶ思いは今尚、新たなるものがあります。

戦跡、海軍司令部壕を訪ね、写真や実写映像を見るにつけ、これでは、生きて帰れようはずがないと納得した次第です。

写真でしか知らない父を思い胸が熱くなりました。

この感激を母に伝えることが出来ず、

残念です。母は昭和五十三（一九七八）年十一月十七日に、享年六十三歳でこの世を去りました。今は天国で親父と会って、息子、孫、ひ孫を見守ってくれていると思います。

親父は農協に勤めていて、その当時としては珍しく、車の運転をしていたとのこと、その当時の写真も残っていて、これが親父か！と写真を見て偲んでいます。

昭和二十二（一九四七）年一月には、祖父も亡くなりました。祖父は、母の実家の叔父、伯母や親父の姉妹達に、母や私の行く末を案じていると言い残して亡くなっていったそうです。

その後、母の実家や親戚に支援を仰ぎながら私も、昭和三十六（一九六一）年、高校を卒業し、電々公社（現ＮＴＴ）に入社し四十二年間奉職し、平成十五（二〇〇三）年三月定年退職しました。

今は二人の子どもも就職、独立し、妻と二人でお互い助け合い励まし合いながら頑張っております。

親父！ご安心ください。この大戦が残した教訓を心に刻み、戦争のない平和な社会を築くため頑張ります。

どうか安らかにお眠りください。」

彼の地で待っていてくれた父

四日市市　平賀　幸代（旧姓水谷）

父は私が六歳になるまでに二回兵隊に行き三回目で帰らぬ人となりました。だから遊んでもらった記憶もなく、顔もおぼえていませんが、三回目の出征の時、家族全員玄関先で記念写真を撮りました。父が写った写真はこれ一枚しかありません。

写真撮影後、村の人達と一緒に平津の駅まで見送りに行きました。

父は列車の後方デッキから、こちらを向いて手をふってくれていた事、私も見えなくなるまで一生懸命手をふっていた事をおぼえています。

今でもあの時の事を思い出すと胸が熱くなり、涙します。

昭和十九（一九四四）年四月入学時のことです。

私には弟二人がいました。父がいなくなった後、母は子供三人育てるのに、それはそれは苦しい生活のはじまりでした。昼間は少しばかりの田畑の仕事、夜は針仕事と休む暇もなく仕事に明けくれていました。だから私も学校から帰るとすぐに田畑の草取りを毎日手伝っていました。草を取りながら母は歌を教えてくれました。

寒い冬の日も麦畑の草取りをし、夏は田の草取りを手伝っていました。

しばらくして、運命の知らせが来ました。昭和二十年二月十三日、ニューギニアで戦死という知らせに、皆でくる日もくる日も、毎日泣いていた事を思い出します。

それからは忙しい農繁期には母の弟に当たるおじさんが遠方から毎日手伝いにきてくれました。あの恐ろしい戦争がなければ、私達一家も貧しくても幸せな暮しが出来たのにと思う時、私はくやしい思いで一杯です。二度と戦争のない事を祈ります。

西部ニューギニア慰霊友好親善訪問団に参加させて頂き、心より感謝致しています。

父の戦死場所は「ムガ」と言う地名でした。今でも原始林で道もなくけわしいジャングルの中、食べる物もなく、だれに会う事もなく、妻や子供の事を思いながら、マラリア蚊のえじきになり、餓死したのかと思うといたたまれません。

父の終焉の地、ムガはジャングルの奥で道もないため、なるべく近くまでつれていってもらい、これより先は無理と言う所でバスをおりて、ムガの方向に向って手を合せた時、父がこの地で寂しい最後を遂げたと思うと人目をはばからず、思い切り泣きました。

戦後六十余年が過ぎた今、一人でも多くの人が戦地でねむる多くの戦没者のために供養を、と願わずにはいられません。きっと戦地では、父上様が待っておられますよ。

戦後の母と私

名張市　藤井　栄子

「お母ちゃん、お父ちゃんってなに?」保育所から帰った私は、聞いたようです。母は何と答えてくれたのでしょう。父が、赤紙一枚で出征して行った二時間後に生まれた私は、なんと皮肉な運命なのでしょう。いや、母の方が、それ以上に最悪の運命です。

僅か二年間程の結婚生活で、二十一歳で戦争未亡人となった母。

公務扶助料の事を何も知らない、戦没者遺族でない人が、「あんたたち、国からようけお金貰えて、ええわねえ」と言うねたみの声に対して、母は悔しくてカンカンに怒っていたことを覚えています。普通の生活が出来る程の金額には、とても及ばなかったと、幼かった私でも感じていました。後になって、近所の人から「私の息子は伍長だったから……」って聞き、兵長の父より多く、位によって差がある事に疑問を感じました。身体一つに変りはないのに。

どん底の貧乏生活に慣れてしまって、恥かしいともなんとも思いませんでしたが、お金のない生活に苦痛を感じ、一にも二にも、金、金のような母に、早く就職して、一杯お金を持たせてやりたい、そればかり考えるようになりました。貧乏生活とお金のないのは、私にとっては、別々に感じていたのは、強い母がいたからだと思います。

母は、父の事を聞かせてくれる事はとうとうありませんでした。気丈な人だけに、精一杯我慢していたのでしょう。ある時、ジャングルで、元日本兵が見つかったと報道された時、父の戦場とは離れているから、絶対別人だ、いや、もしかして名前が判ったらと、母がお風呂に入っている間に、音を立てないように新聞をめくって調べましたが、やっぱり違ってホッとしたような、がっかりだったのか、複雑な心境でした。母もきっと私が学校へ行ってる間に調べたと思います。

背丈とか声とか、父の事を何でも聞きたいと思っていたのに、母は六十九歳で急死してしまいました。以来十六年、私は今年六十四歳、いまは亡き両親が、いつも見守ってくれている事を感じ、毎日元気に過しています。毎朝、過去帳をめくり、夕には「こんな煮物やけど、湯気の上っている間に食べて。」と話をし、お経をあげてから夕食をいただく。こんな日課に一つの落ち着きを覚える毎日です。

アッツ島に玉砕した父

尾鷲市　真井　紀夫

父・真井和夫は、太平洋戦争で戦死をいたしました。墓石には、「昭和十七(一九四二)年十月に三十三連隊の暁部隊に編入され、十二月に北方アッツ島の守備隊として渡航、翌年五月敵大部隊の奇襲上陸があり大損害を与えるも、我もまた山崎部隊長以下二千五百の戦友と共に全員玉砕する。行年三十一歳」と刻まれています。

私が三歳の時の出来事ですので、父の顔も知らず、何も覚えていません。ただ一人、父の昔話をしてくれる八十七歳の従兄は、「お前は、和夫さんによく似てきた」と、つぶやくことがあります。なんとなく、お人よしでのん気な人であったのではないかと想像しております。

私の人生の前半は、貧困の母子家庭の生活そのもので、時には世の中を恨むこともあったように思いますが、それでも勉強に仕事に、希望をもって励むことができました。父から受け継いだ楽天的なお人よしの血が幸いしたのだと思っています。

昭和の時代は、六十三年で幕を引きましたが、その幕開けは日本にとって、内外の危機と戦争の時代であったこと、そして戦後の荒廃の中から立ち上がって現在の日本があることを、今の若い人たちに、どう伝えていくか、そのことが少し気になっています。

最近の世界各地で起きる痛ましい事件、テロや紛争、飢餓や戦争で死んでいく子供たち。そして、豊かな国だといいながら少子化がますます進んでいく日本。特に、跡継ぎの子孫が住むこともなく、消えかかっている地方の集落。日本がこのまま進んでいくと、将来はどうなるのだろうか…、東紀州の集落はいくつ残れるのだろうか…と、そんな思いが、心の中をよぎります。

戦没者が命をかけて守ろうとした祖国や郷土の未来は、もっと明るいものでなくてはならないはずです。

【編集部注】
アッツ島は、米国本土アリューシャン列島の一部。ミッドウェー作戦と連動して占領作戦が立てられた。山崎保代陸軍大佐が率いるアッツ島守備隊(一部海軍含む)は、米軍の圧倒的な物量攻撃に、敢闘むなしく昭和十八年五月二十九~三十日、山崎部隊長以下が最後の突撃を敢行して玉砕した。戦没者二千六百三十八人、生還者は僅か二十七人。太平洋戦争最初の玉砕とされる。

兄を想うー天皇陛下がお参りできる靖国神社に

度会郡南伊勢町　森本　良松

召集を受けた七郎兄は、村人に送られ、「行きます」と元気よく出征して行きました。そして、兵庫県の陸軍加古川基地で飛行機の整備兵として訓練を受け、外地へ出発する際、面会した父母に、「妻子のない自分は、遠くへ行くようです。これでもう会えないと思います」と、今までの恩に謝して別れて行ったと、母は何度も私たちに言って聞かせました。昭和二十（一九四五）年八月十五日、終戦。

兄の安否については、「昭和二十年六月二十五日、ニューギニア・ウエワク方面の戦闘で戦死」との公報が届き、数ヵ月後に白木の箱が届きました。家族らで蓋を取って開けると、マッチ箱の三分の一ほどの木片が一つ入っていたのです。

母は、「なんやカチカチやんか」とつぶやき、それから「七郎はどこで、どんなにして死んだのやら」が始まりました。百歳まで生きた母ですが、晩年には、実の娘である姉と、いとこを間違えるようになってしまいました。それでも、「七郎は、どこで、どんなにして…」の独り言が続いたのです。

一方、八十九歳まで生きた父は、「日露（戦争）の生き残りは、俺だけになってしもた…」から始まる昔話の後に必ずといってよいほど、軍人の鑑（かがみ）・乃木大将は、二人のご子息を日露の戦いで亡くされたこと、明治天皇御大葬の夜、静子夫人と共に自決されたことなど、何度も何度も私たちに聞かせました。それを語ることで、自分を自制していたと思われます。

平成五（一九九三）年発刊の「地獄のニューギニア戦線—見捨てられた軍団」は、もし父母が生きていたとしても、その写真を見せたり、文を読み聞かせたりできるようなものではありません。ガダルカナル攻防戦（南太平洋ソロモン諸島）、インパール侵攻作戦（インド東端、ミャンマー国境近く）等々、人間性を失うほどの境地にまで兵士を追い込んだ無謀な命令を下せたのは、どうしてでしょうか。作戦を指揮・命令した人たちは、安全な後方にいたから、責任の重大さが分からなかったのでは、とさえ思いたくなります。

今年も、昨年に続いて靖国神社に参拝し、兄に会ってきました。私の脳裏に浮かぶのは、小学生の私に、鶏小屋の屋根から竹馬に乗って見せたり、細かい竹の杉鉄砲や、カルメラを作ってくれた優しい兄でした。

私の心の中では、靖国神社は、きちんとA級戦犯の分祀が出来ているのです。中国や韓国が言うからではありません。以前、あれこれ考えたこともありましたが、テレビで某A級戦犯のご遺族の発言を聞いて、完全に分祀を決めました。どんな理屈を並べられても、考えを変えることはないと思ってます。

私は、日本遺族会会長で衆議院議員の古賀誠さんの思い、板垣正元参議院議員に働きかけて分祀を進めようとされた中曽根康弘元総理の思いに大賛成です。家族を愛し、郷土を愛し、そして祖国のために散って逝かれた方々への畏敬（いけい）の念からもまた、英霊が貫かれた武士道の精神性からも、合祀に賛成される方とは、考えを異にすると思っています。

天皇陛下をはじめ全国民が何のわだかまりもなく、お参りできる靖国神社でありたい。この念願を、一日も早く実現していただくことを心から希求します。

（写真提供／東京　ツカモト）

【編集部注】

ガダルカナル攻防戦

航空基地建設のためガダルカナル島に進出した日本軍に対し、昭和十七（一九四二）年八月米軍が上陸し、十八年二月に日本軍が撤退するまで激戦が続いた。二万一千人が戦病死、餓死したとされ、「餓島」と呼ばれた。

インパール作戦

昭和十九年三月〜七月、英印軍のビルマへの圧力を阻止するため、十五軍司令官牟田口中将が提案して強行された無謀な作戦。制空権も補給もないまま投入された九万人の将兵は餓えと病気に倒れ三万人が死亡。退却路は「死の白骨街道」と呼ばれた。